



Title	ドイツ語から見たゲルマン語(4) : 冠詞と指示詞
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 163, 1(左)-22(左)
Issue Date	2021-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.163.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80813
Type	departmental bulletin paper
File Information	1001_bfhhs_163_l1.pdf



ドイツ語から見たゲルマン語 (4)

— 冠詞と指示詞 —

清 水 誠

German as a Germanic Language (4)

— Articles and Demonstratives —

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 163.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2021. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1-1. 古ゲルマン諸語—冠詞の欠如¹

ゲルマン諸語の定冠詞は指示代名詞、不定冠詞は数詞「1」から発達した (Ramat 1981: 85ff.)。ゲルマン祖語に冠詞はなく、初期の古ゲルマン諸語では無冠詞名詞の使用が頻繁だった。詩行の冒頭などで、裸の名詞を強く発音して強調することもあった (Hodler 1954: 98)。『ルートヴィヒの歌』(ド *Das Ludwigslied* 881/882)² の 48-49 行はその一例である。古高ドイツ語ライン

¹ 本研究は清水 (2019) (2020) (2021) の続編であり、科研費の助成による (ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述, 基盤研究 (C) (一般), 19K00540)。

² カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア: アイスランド語, 印欧: 印欧祖語, 英: 英語, オ: オランダ語, ゲ: ゲルマン祖語, ゴ: ゴート語, 古英: 古英語, 古高ド: 古高ドイツ語, 古ノ: 古ノルド語, ザ:

フランケン方言（または西フランケン方言）による全 59 行のこの作品は、西フランク王国を脅かしたノルマン人の襲撃を 881 年 8 月初めに打ち破ったルートヴィヒ 3 世 (Ludwig III, ca. 864-882) の業績を称えて書かれた。

- (1) 古高ド *Sang* uuas gisungan, *Uuig* uuas bigunnan./*Bluot* skein in *uuangōn*. Spilōdun ther *Vrankon*. その歌が^s (sang, ド *der* Gesang) 歌われると (uuas gisungan), 戦いが^s (uuig, ド *der* Kampf) 開始された (uuas bigunnan)。/血が^s (bluot, ド *das* Blut) 頬に (in uuangōn, ド auf *den* Wangen) 輝き (skein), そこで (ther) フランケン人たちは (Vrankon, ド *die* Franken) 躍動した (spilōdun)。

(Braune/Ebbinghaus 1979¹⁶: 137)

55 行目には、「定冠詞＋属格＋名詞」による *Gilobōt sī thiū godes kraft* 「神の力が (thiū godes kraft) 称えられんことを (gilobōt sī)」が見られる。これは現在では許されず、ド *Gelobt sei Gottes Kraft/die Kraft Gottes*. となる。現代語の定冠詞と属格（正確には属格語尾 -es）は、ともに限定詞句 (DP) の主要部 (D) の位置を占めるので、共起できない。古高ドイツ語では、統語範疇としての限定詞句が未確立だったのである。定冠詞は古高ドイツ語期、不定冠詞は中高ドイツ語期に成立し (Szczepaniak 2011²: 104), 中高ドイツ語末期に現在の使用状態に達したとされている (Hill 2013: 112f.)。

古語の指示代名詞にも、文脈（コンテキスト）内の要素を同定する機能はあった。ただし、それは「直示」(deixis), それも、発話状況を基準とする「場面内指示」(situational deixis) の延長として、前出・後出の要素を話題化

西低地ドイツ語北低地ザクセン方言, ス: スウェーデン語, フ: スイスドイツ語チューリヒ方言, 中英: 中英語, 中高ド: 中高ドイツ語, デ: デンマーク語, ド: ドイツ語, 西フ: 西フリジア語, ニ: ノルウェー語ニューノシュク, ブ: ノルウェー語ブークモール, フ: フェーロー語, フリ: 北フリジア語フェリング方言, フラ: フランス語, ペ: ペンシルヴェニアドイツ語, メ: 東低地ドイツ語メクレンブルク・フォアポマーン方言, モ: 北フリジア語モーリング方言

するはたらきだった。不定冠詞の前身も、具体的な指示物を同類の対象から際立たせて提示するときに使った。つまり、語用論的役割が大きく、話者の裁量に任されていたのである。冠詞の発達によって、名詞の意味に直結する^{すう}数を除いて性・格の表示が名詞から冠詞に代表される「限定詞」(determiner)に移り、「名詞句」(NP, noun phrase)は「限定詞句」(DP, determiner phrase)に拡張された。動詞で言えば、過去形(ド er hörte 彼は聞いた)の屈折語尾 -te から完了形(ド er **hat** gehört 同左)の助動詞 hat に過去時の標識が移ったのに似ている。名詞にとって冠詞とは、動詞にとっての助動詞に相当し(Roehrs 2009)、いわば「文法機能の乗っ取り犯」なのである。

1-2. 不定冠詞と否定冠詞—フェーロー語の不定冠詞複数形

ゲルマン諸語の不定冠詞は発達が遅く、アイスランド語では古典ギリシア語と同じく未発達である。複数形はフェーロー語に限られ、「1対, 1セット」の意味で複数形で固定した名詞に使う。つまり、数詞「1」の意味を残しており、複数形として十分に確立しているとはいいがたい。(3)の skógvar だけでは「何足かの靴」の意味になる(Thráinsson et al. 2004: 91-94)。

(2)	フェー	単一	複数	男性		女性		中性
	主格	ein	einir	ein	einir	eitt	eini	
	対格	ein	einir	eina	einir	eitt	eini	
	与格	einum	einum	einari/eini	einum	einum	einum	

(3)	フェー	主格	男性	単数	ein dagur	ある日	複数	einir skógvar	ある1足の靴
		女性			ein gáva	ある贈り物	einir buksur	ある1足のズボン	
		中性			eitt land	ある土地	eini hjún	ある1組の夫婦	

一方、ド einige/英 any 「いくつかの」は「ド ein/英 a(n) + 形容詞派生接尾辞 -ig/-y」の派生語で、**ein** Buch/**a** book 「ある1冊の本」と **einige** Bücher/

any books「何冊かの本」には意味的関連がある。しかし、その付加は義務的ではなく、不定代名詞に分類される。中高ドイツ語には不定冠詞の前身による *in einen* ziten「ある時期に」/*zeinen* pfingsten「聖霊降臨祭の頃に」(← *in/ze* + *einen* 複数与格) などの複数形があったが (Paul/Wiehl/Grosse 1989²³: 388, 古賀 1995²: 74), 定着しなかった。単数形にしても不可算名詞には使わないのだから、現代ゲルマン諸語の不定冠詞には未確立の余地があると言えるだろう。フランス語の *un* livre — *des* livres「本」(ド *ein* Buch — Ø Bücher) やいわゆる部分冠詞 *du* vin/*de la* beurre「ワイン/バター」(ド Ø Wein/Butter) と比較されたい。73 livres, vin, beurre だけでは普通は使わない。

ただし、否定冠詞を認めれば、単複ともに発達していると言える (ド *kein* Buch — *keine* Bücher, 英 *no* book — *no* books; ド *kein* Wein/*keine* Butter, 英 *no* wine/*no* butter)。否定冠詞は不変化詞と数詞「1」の複合に由来する。不変化詞には、①不定の意味 (k-/g-, -gi(n)/-ge(n)) と②否定の意味 (n-) にさかのぼる場合がある (①ド *kein*/オ *geen*/西7 *gjin*, ア *engin*/フ1 *eingin*/ス・デ・ブ・ユ *ingen*; ②英 *none/no* < 古英 *nān*, モ *nān*/フ1 *neen* < 古7 *nēn*)。

1-3. 指示代名詞から定冠詞へ — th/p/d/t-系列と s-系列

次に、定冠詞と指示代名詞の関係について検討しよう。指示代名詞から定冠詞への発達は、発話場面と前後の文脈 (コンテキスト) での直示的機能が弱まることで促された。古ゲルマン諸語の指示詞には、「th/p/d-系列」(英 *that*/ゴ *þata*/ド *das* < ゲ **pa-* < 印欧 **to-*) と「s-系列」(ア *sá/sú*, ゴ *sa/sō* < ゲ **s-* < 印欧 **so-*) があった。「s-系列」は男・女性単数主格に見られ、その他の語形は「th/p/d-系列」を示す。男・女性単数主格形の古ザクセン語 *thē/thiu* と古高ドイツ語 *der/diu* は、他の格形との類推で「s-系列」から「th/p/d-系列」に移行した (Krahe/Meid 1969^{7b}: 61–63)。「ゴート語/古ノルド語/古英語/古ザクセン語/古高ドイツ語」の順に示す (Fulk 2018: 194)。部分的に見られる「h-系列」(Krahe/Meid 1969^{7b}: 69) については、1-6/1-8 で扱う。

ドイツ語から見たゲルマン語 (4)

(4) 単数：男性	女性	中性
主格 sa/sá/sě/thě/der	sō/sú/sēo/thiu/diu	þata/þat/þæt/that/daz
対格 þana/þann/þone/thena/den	þō/þá/þā/thia/dea	þata/þat/þæt/that/daz
与格 þamma/þeim/þēm/themu/demu	þizai/þeir(r)i/þære/theru/deru	þamma/þ(v)i/þēm/themu/demu
属格 þis/bess/þæs/thes/des	þizōs/þeirar/þære/thera/dera	þis/bess/þæs/thes/des
具格 Ø/Ø/þý, þē/thiu/Ø	Ø/Ø/Ø/Ø/Ø	þē/þ(v)i/þý, þē/thiu/diu
複数：男性	女性	中性
主格 þai/þeir/þā/thea/dē	þōs/þær/þā/thea/deo	þō/þau/þā/thiu/diu
対格 þans/þá/þā/thea/dē	þōs/þær/þā/thea/deo	þō/þau/þā/thiu/diu
与格 þaim/þeim/þēm/thēm/dēm	þaim/þeim/þēm/thēm/dēm	þaim/þeim/þēm/thēm/dēm
属格 þizē/þeir(r)a/þāra/thero/dero	þizō/þeir(r)a/þāra/thero/dero	þizē/þeir(r)a/þāra/thero/dero

現代語は t-系列 (フ₁ t-<þ- [θ]) を加えた「th/þ/d/t-系列」である。(5) で確認しよう。アイスランド語は単数男/女性主格 sá/sú に「s-系列」を残している。ドイツ語は「d-系列」、フェーロー語は「t-系列」で、指示代名詞の無強勢形が(前置)定冠詞のド der/フ₁ tann に対応する。古風な表現で使う定冠詞のア/フ₁ hinn/hin については、1-6/1-8 で説明する。英語では単数主格男性 sē が s->þ- に置換され、1200 年頃までに無変化の þe (>the) として定着した。単数中性 þæt は遠方指示代名詞 that として、this (1-8 参照) と対立するようになった(寺澤 1997: 1422f, 中尾 1983²: 123, 158)。

(5) ア/フ ₁ /ド	男性	女性	中性
単数：主格	sá/tann/der	sú/tann/die	það/tað/das
対格	þann/tann/den	þá/ta/die	það/tað/das
与格	þeim/tí/dem	þeirri/teirri, tí/der	því/tí/dem
属格	þess/Ø/des	þeirrar/Ø/der	þess/Ø/des
複数：主格	þeir/teir/die	þær/tær/die	þau/tey/die
対格	þá/teir/die	þær/tær/die	þau/tey/die
与格	þeim/teimum/den	þeim/teimum/den	þeim/teimum/den

属格 þeirra/Ø/der

þeirra/Ø/der

þeirra/Ø/der

1-4. 冠詞の基本形と弱形—前接語と前置詞との融合形

1-4-1. ドイツ語定冠詞の前置詞との融合形—前置詞の屈折？

西ゲルマン語の指示代名詞は指示詞標識 *th-/d-* を受け継いでおり、英語やドイツ語の定冠詞 *the/der* に至っている。ドイツ語の定冠詞は強勢の有無で指示代名詞と大部分が共通だが、「前置詞-冠詞縮約」(preposition-article contraction) による *ins* Zimmer 「部屋の中へ」(←*in das*) / *zur* Schule 「学校へ」(←*zu der*) などの前置詞との融合形がある。これは前置詞を受け手(ホスト *host*) とする「前接語」(enclitic) で、指示詞標識 *d-* を欠き、定冠詞基本形 *das/der* に対する異形態としての弱形 *-s/-r* である。

前置詞と定冠詞弱形(融合形)の結びつきには、(6)に示す段階がある。

①では、*beim* を除いて前置詞に異形態(*an*~*a-*, *zu* [*zu:*]~*zu-* [*zʊ*])があるが、②では前置詞と定冠詞の境界が明確である。③はルクセンブルク語の *mam/nom*←*mat/no dem* (ド *mit/nach dem*, 英 *with/after the*) と違って、早口の会話に限られる。融合形がない④には、「前置詞+*des*」以外に、他の品詞から転じた前置詞が含まれる(Duden 2009⁸: 615-619, Nübling 1998)。

- (6) ド ① 融合形定着: *am/beim/im/vom/zum*←*an/bei/in/von/zu dem* (英 *on/by/in/of/to the*); *ans/ins*←*an/in das*; *zur*←*zu der* (英 *onto/into the*; *to the*)
- ② 融合形自由: *für das/fürs*, *vor dem/vorm* (英 *for/before the*) など
- ③ 融合形早口会話: [*mit 'm*~*mim/nach 'm/aus 'm*←] *mit/nach/aus dem* (英 *with/after/out of the*); [*an 'n/auf 'm/in 'e/von 'er*←] *an den/auf dem/in die/von der* (英 *onto/up/into/of the*); [*gegenüber 'm*←] *gegenüber dem* (英 *opposite the*) ↔ ② *über dem/überm* (英 *over the*) など

- ④ 融合形不可：前置詞 + des；ohne/wegen/während/namens/
ausschließlich (～なしに；ゆえに/の間に/の名前で/を除いて)
など

不定冠詞 *einem*/定冠詞 *dem* では、*ein-/d-* が語幹で、*-em* が男・中性与格語尾である。そこで、*beim* (←*bei dem*, 英 *by the*) の *-m* は「語幹を欠く語尾」であることになる。しかし、語幹のない単語などあるのだろうか。*beim* は *bei* の変化形に似ているが、だとすると、「前置詞が屈折する」ことになる。もちろん、屈折とは(まだ?) 言えない。融合形は「*dem* > *das* > *den* > *der* > *die* (> **des*)」の順に稀になり、前置詞は1音節で語末音が「母音 (*zu/bei*) /-n (*an/in/von*) > -r [ʁ] (*für/über*) > 障害音 (*nach/aus/mit/seit*)」の順に減少し、(6) ④の融合形不可の前置詞があるなど、制限が強いからである (Nübling 1998: 275-283)。それに、詩などでは、韻律の関係で前置詞以外の語を受け手(ホスト)とした前接形も多用される。ブラームスの作曲で有名な『子守歌』(ド *Wiegenlied*) の第2節を見てみよう。Schau im Traum's Paradies 「夢の中で天国をごらん」では、名詞 *Traum* 「夢」に定冠詞中性単数 *-s* (←*das*) が前接し、第1節の *Wirst du wieder geweckt* 「また目が覚めるから」に合わせて「強-弱-強-弱-弱-強」の音節連続が保たれている。

- (7) ド Guten Abend, gut Nacht, /Mit Rosen bedacht, /Mit Näglein besteckt, /
Schlupf unter die Deck: /Morgen früh, wenn Gott will, /Wirst du
wieder geweckt.

夜よ、さあ、おやすみ/バラの花に覆われて/^{なでしこ}撫子の絵柄に包まれて/
毛布にくるまりなさい/明日の朝、神様の思し召しでまた目が覚めるから

- ド Guten Abend, gut Nacht, /Von Englein bewacht, /Die zeigen im
Traum/Dir Christkindleins Baum: /Schlaf nun selig und süß, /Schau
im Traum's *Paradies*. (Fischer-Dieskau (ed.) 1995: 403)

夜よ, さあ, おやすみ/天使たちに守られて/夢の中で見せてくれる/
 幼子キリスト様のプレゼントの木を/お眠り, 安らかに/夢の中で
 (im Traum) 天国を ('s Paradies) ごらん

とは言え, 任意の施設に使う *ins* Kino/Theater gehen「映画館/劇場に行く」では, (6)①の定着した定冠詞融合形 *-s* に照応機能はない。*im* Kino/*am* Theater sein「映画館にいる/役者である」と対比すれば, *ins* の *-s* と *im/am* の *-m* は, *das* の *-as* と *dem* の *-e* に似ており, それぞれ方向を表す対格語尾, 位置を表す与格語尾のような印象を受ける。「前置詞は屈折しない」と決めつけることはできない。ケルト諸語には, 前置詞の(人称・数による)屈折が存在するのである (Fife/King 1998: 483-485)。

1-4-2. スイスドイツ語チューリヒ方言とペンシルヴェニアドイツ語の冠詞

ドイツ語諸方言の定冠詞を見てみよう。上部ドイツ語アレマン方言に属するスイスドイツ語チューリヒ方言と, 中部ドイツ語から発達したペンシルヴェニアドイツ語では, 単数の中性共通格 *es* と男・中性与格 *em* に指示詞標識 *d-* がない。これは無強勢の弱形で, *e* は一律にあいまい母音 [ə] である。

(8) 定冠詞: 単数	男性	女性	中性	複数
fi 共通格 (主・対格)	de/(der+母音)	d/(di+形容詞+名詞)	<i>s</i>	d
与格	<i>em</i>	de/(der+母音)	<i>em</i>	de/(den+母音)
pe 共通格 (主・対格)	der	die	<i>es</i>	die
与格	<i>em</i>	der	<i>em</i>	de

Russ(ed.) (1990) 所収のドイツ語 14 方言では, 「中性単数主・対格/共通格 > 男・中性与格 > 複数与格」の順に指示詞標識 *d-* を欠く弱形が見られる。とくに前置詞との融合形では頻繁である。低地ドイツ語の話し言葉でも, 西低地ドイツ語北低地ザクセン方言は 'n←de/den, 't←dat, 東低地ドイツ語メクレンブルク・フォーアポマーン方言も 'n←denn, 'e←de, 't←dat となる。

- (9) 単数: 男性 女性 中性 複数
 ザ/メ 主格 de/de de/de dat/dat de/de
 目的格 den/denn de/de dat/dat de/de
 ザ vun'**n** Buurn (←vun **den**) 農夫の in't Mitt (←in **dat**) 中心に
 achter'**t** Holt (←achter **dat**) 森の奥に (Goltz/Walker 1990: 46)
 メ up'**n** Bähnhoff (←up **denn**) 駅で up'**e** Schaul (←up **de**) 学校で
 vör'**t** Gewidder (←vör **dat**) 嵐の前に (Herrmann-Winter 2006: 111)

スイスドイツ語チューリヒ方言やベルン方言には、不定冠詞にも前置詞との融合形で現れる弱形 *eme/ere* があり、語幹を欠く語尾 (ド *(ein-)eme/er*) に対応する (チ *ab eme baum* *abe gheie* 木 (*baum*) から落ちる, *uf ere riitschuel faare* 回転木馬 (*riitschuel*) に乗る, *mit eme maitli gaa* 女の子 (*maitli*) とデートする, Schobinger 2007³: 51)。とくに母音で始まる前置詞では、「母音連続」(hiatus)を回避して *n* を挿入する (チ *anere/vonere/zunere* ← *a-n-ere/vo-n-ere/zu-n-ere* ← *a/vo/zu ere* (ド *an/von/zu einer*, 英 *on/of/to a(n)*)。基本形 *emene* は、中高ド *einem(e)* の *m~n* が「音位転換」(metathesis) を被った語形で、母音で始まる前置詞との融合形でも同様の音位転換が起きる (チ/ベ *amene/vomene/zumene* ← *a-n-eme/vo-n-eme/zu-n-eme* ← *a/vo/zu eme* ← *a/vo/zu eme* (ド *an/von/zu einem*, 英 *on/of/to a(n)*)) (以上, Marti 1985: 79, Schobinger 2007³: 51)。

ペンシルヴェニアドイツ語の不定冠詞与格は、弱形 *me/re* のみである。これは語幹にあたる共通格 *en* に対して、語尾にあたる上記の *eme/ere* に相当する。

- (10) 不定冠詞: 単数 男性 女性 中性
 チ 共通格(主・対格) *en* *e/(en+母音)* *es/(e+形容詞+名詞)*
 与格 *emene/eme* *enere/ere* *emene/eme*
 ベ 共通格(主・対格) *e/(en+母音)* *e/(en+母音)* *es*
 与格 *emene/eme* *enere/ere* *emene/eme*

ベ	共通格(主・対格)	en	en	en
	与格	<i>me</i>	<i>re</i>	<i>me</i>

スイスドイツ語が属する上部ドイツ語アレマン方言には、「前置詞＋不定冠詞」の融合形が広く見られる(Nübling 1992)。(10)の両者では、ドイツ語よりも「前置詞の屈折」が一步進んでいるようである。

ここで、改めてドイツ語の前置詞との定冠詞融合形を検討しよう。ドイツ語では、Er geht *zum* Bahnhof.「彼は駅に行く」の代わりに*zu dem* Bahnhof と言うと、dem[ˈde:m]には強勢が置かれ、「その駅に」という指示的意味になる。固有名詞などの「唯一指示物」(ド Unikum)では、*ans* Mittelmeer「地中海へ」/*zum* Mond「月へ」に対して、**an das* Mittelmeer/**zu dem* Mond は不自然である。ド *ums* Leben kommen「命を落とす」/*hinters* Leben führen「欺く」(←um/hinter das)など、個別の対象の指定が不要な慣用句では、融合形が義務的である。このように、(6)①の「定着した定冠詞融合形↔定冠詞基本形」は、「定冠詞↔指示代名詞」として棲み分けている。

前置詞との融合形は古高ドイツ語にもあり、中世以来、指示詞標識 d-の有無による異形態の併存が続いた。その結果、(6)①の *am/beim/im/vom/zum/ans/ins/zur* では、d-を欠く8つの融合形 -m/-s だけが定冠詞になった。dem/das は指示代名詞のままなのである。一部の語だけを対象にした dem [dɛm]/das [das] > m [m]/s [s] の変化は、音韻変化とは言えない。定冠詞基本形が de-/da-を失って、融合形になったのではない。指示詞標識 d-の有無で併存する異形態の中から、定冠詞への選択がなされたのである。ドイツ語では、前置詞の種類で結果が(6)①～④のように割れている。一方、チューリヒ方言やペンシルヴェニアドイツ語では、この選択が体系的に行われ、(8)の d-を欠く弱形 s/es/em が正規の定冠詞の座を射止めたのである。(10)の不定冠詞についても同様である。

1-4-3. オランダ語と西フリジア語の定冠詞基本形・弱形

オランダ語と西フリジア語では、指示代名詞と定冠詞の語形が異なり、定

冠詞中性単数は指示詞標識 *d-* を欠く無強勢の弱形 (オ *het* [ət]/西 *it* [ət]) である。オ *het* は中期オランダ語の指示代名詞弱形 *'t* (←*dat*) の継承で, *h-* は人称代名詞 (オ *hij/hem/haar*, 英 *he/him/her*) との類推による正書法上の添え物である (Donaldson 1983: 162f.)。西フリジア語には, 基本形 *de* [də]/*it* [ət] に対して, 前置詞との融合形で使う弱形 *'e* [ə]/*'t* [t] がある。

(11)	オ/西	単数	両性	中性	複数
	指示代名詞	die [diː]/dy [di]	dat [dat]/dat [dɔt]	die [diː]/dy [di]	
	定冠詞	de [də]/de [də]	het [ət]/ it [ət]	de [də]/de [də]	
	西	定冠詞弱形	'e [ə]	't [t]	'e [ə]

- (12) 西 *de* fyts/krante その自転車/新聞 *it* wurk/boek その仕事/本
 op *de/'e* fyts 自転車に乗って yn *de/'e* krante 新聞に
 nei *it/'t* wurk 仕事(場)へ yn *de/'e* boeken 本(複数形)の中に

ところが, (12) の基本形 *de/it* と弱形 *'e/'t* は無強勢で, 指示性の有無とも無縁である。慣用句を除けば, 基本形 *de/it* は書き言葉, 弱形 *'e* [ə]/*'t* [t] は話し言葉で多用し, 文体または好みの問題にすぎない (清水 2006: 94-96)。

(11) に示したように, 西フリジア語の指示代名詞 *dy/dat* は定冠詞基本形 *de/it* と弱形 *'e/'t* と明確に異なる。これは英語の *the* ↔ *that* という独立した2語の関係に似ている。強勢の有無で指示代名詞と定冠詞の間で所属が揺れるドイツ語とは, 事情が違うのである。西フリジア語の定冠詞基本形 *de/it* と弱形 *'e/'t* の相違は, 前接語か否かにあるが, 指示詞標識 *d-* の有無にかかわらず, ともに無強勢で指示性を欠く点でユニークである。

1-5. 北フリジア語の母音定冠詞 (A/E-定冠詞) と D-定冠詞

一方, 北フリジア語には, 語形的には弱形と基本形に対応するように見えるものの, 接語化の有無とは無関係に, 異なる用法を備えた2種類の定冠詞

がある。「母音定冠詞 (A/E-定冠詞)」と「D-定冠詞」がそれで、ゲルマン諸語で比類ない用法を発達させている³。前者は指示性を欠き、区別の必要がない指示物に用い、後者は指示性を保ち、発話状況や文脈 (コンテキスト) の中で同定する指示物に使う。前者を「既知定冠詞」(ド Bekanntheits-artikel), 後者を「照応定冠詞」(ド anaphorischer Artikel) と呼ぶこともある (Ebert 1998: 269)。大陸方言を代表するモーリング方言と島方言で最も有力なフェリング方言を検討しよう⁴。不定冠詞は無変化の en/'n だけである。

(13)	単数: 母音定冠詞/D-定冠詞	複数: 母音定冠詞/D-定冠詞
モ 男性	<i>e/di</i> moon/dai 男/日	<i>e/da</i> mååns/deege
女性	<i>e/jü</i> brädj/nåcht 花嫁/夜 (jü < *djü)	<i>e/da</i> brädje/nächte
中性	<i>et/dåt</i> bjarn/hüs 子供/家	<i>e/da</i> bjarne/hüsinge
フ ¹⁾ 男性	<i>a/de</i> maan/dai 男/日	<i>a/dön</i> maaner/daar
非男性	<i>at/det</i> bridj/hüs/nocht 花嫁/家/夜	<i>a/dön</i> bridjen/hüsing/nochter

モーリング方言では, *Di moon* kamt. 「今, 話題にした男が来る」に対して, *E moon* kamt. は「(私の) 夫が来る」の意味になり, *e san/moune* 「太陽/月」には普通は *di* は使わない (清水 1992: 140)。次に, 有名な詩を紹介しよう。北フリジア語擁護に生涯を捧げたアルブレヒト・ヨハンゼン (Albrecht Johannsen 1888-1967) の作品で, 上下に黄赤青と色分けされた北フリースラントの3色旗を掲げる姿に, 北フリジア語の未来に思いを馳^はせている (清水 (2010: 82-86) 参照。モ *as/san*~である, ド *ist/sind*; モ *än* そして)。

- (14) モ *Gölj* — *rüüdj* — *ween* 『黄金色, 赤, 藍の色』 (Johannsen 1991 (1956): 9)

³ ノルトライン・ヴェストファーレン州西部, アーマーン (ド Amern) の低地ドイツ語低地ライン方言の定冠詞 (男/女/中性単数主格) *d(ə)r/də/(ə)t* と *dä/di/dot* の用法もこれと似ている (Ebert 1971a: 182-188, Heinrichs 1954: 85-103)。

⁴ 語形は Arfsten/Paulsen-Schwarz/Terhart (2019: 125), Wilts (1995: 16) による。

* 全4節から第1節を割愛して、第2,3節を引用。

Rüüd¹ as **e san**² än lååket³ sü⁴ swätj⁵, 赤は¹陽の光²いとも⁴甘美に⁵微笑み³

Rüüd¹ san **da kliiwre**² uk³, 赤は¹また³(幸せを運ぶ) クローバー²の色

Än¹ rüüd² san **da siike**³ foon⁴ min⁵ latj⁶ brädj⁷; そして¹赤は²私の⁵幼い (= 小さな)⁶花嫁⁷の⁴頬³の色

Dåt¹ as wälj² for³ liiwde⁴ än⁵ luk⁶. それは¹まさに²愛⁴と⁵至福⁶を湛える³色

Ween¹ as **dåt wâåder**² bai³ dik⁴ än⁵ doom⁶, 藍(=青)は¹堤防⁴と⁵ダム⁶に伝う
(= のもとにある)³水²の色

Ween¹ as **e luft**² ouer³ üs⁴, 藍は¹我ら⁴の上に広がる³空²の色

Än¹ ween² san **da uugne**³ foon⁴ min⁵ latj⁶ foom⁷; そして¹藍は²私の⁵幼い
(= 小さな)⁶娘(= 少女)⁷の⁴瞳(= 目)³の色

E trou¹ as önj² Fräschlönj³ tu hüs⁴. 真心は¹フリースラント³の地に²宿る⁴

母音定冠詞 (E-定冠詞) は e san 「日光, 太陽」, e luft 「空」, e trou 「真心」のように、区別が不要な対象や概念についている。D-定冠詞は眼前に広がる da kliiwre 「クローバー」や da siike foon min latj brädj 「私の幼い花嫁の頬」, dåt wâåder bai dik än doom 「堤防とダムに伝う水」, da uugne foon min latj foom 「私の幼い娘の瞳」のように、修飾句で限定された具体的対象に使っている。どれも前置詞への接語化による融合形ではない。

この現象で有名なのはフェリング方言で、古くから注目を集めてきた (Lyons 1999: 160-165, Ebert 1971a, 1971b; Löfstedt 1968, 1964, Selmer 1926)。

(15) フェリ ① Hat hee en dring. **De dring** wurt temelk ferwenet. 彼女には (hat) 男の子が (en dring) いる (= を持っている hee)。その男の子は (di dring) かなり (temelk) 甘やかされている (wurt ~ ferwenet)

② **De maan**, diar nü komt, as man bruler. 今 (nü) やって来る (diar ~ komt) 男の人は (de maan) 私の兄 (man bruler) です

(as)

- ③ Hi hee **a fut** breegen. 彼は (hi) 足を (a fut) 骨折した (hee～breegen)
 - ④ **A aapel** fäält ei widj faan **a buum**. リンゴは (a aapel) 木から (faan a buum) 遠くに (widj) 落ちない (fäält ei) (= 蛙の子は蛙)
 - ⑤ **A san** skintj. 太陽が⁸ (a san) 照っている (skintj)
- (清水 2002: 112 変更)

D-定冠詞は、①では前出の名詞句を de dring「その男の子」で同定している。②の de maan「男の人」は関係文 diar nū komt「今やって来る」で限定された先行詞である。母音定冠詞 (A-定冠詞) は、「譲渡不可能」(inalienable) な身体部位の③ a fut「足」や唯一指示物の⑤ a san「太陽」に現れ、④は対象を特定しない総称の意味である。3 者とも他との区別を要しない。

1-6. 北ゲルマン語の定冠詞—定冠詞境界線、前置・後置定冠詞と二重限定

指示詞標識 d- の有無による 2 種類の定冠詞は、隣接するデンマーク語にもある。ただし、「名詞 + 後置定冠詞 (d- 無し)」↔「前置定冠詞 (d- 有り) + 形容詞 + 名詞」のように形容詞の有無で使い分け、語順も異なる。現代ゲルマン諸語の定冠詞は、デンマーク・ユトランド半島中央の「定冠詞境界線」(artikelgrænsen) を境に、西側に位置する西ゲルマン語とデンマーク語西ユトランド方言 (デ vestjysk) の「前置定冠詞」(preposed definite article) に対して、東側に広がるその他の北ゲルマン語の「後置定冠詞」(postposed definite article) に分かれる (西 æ skilt/hus その看板/家 (両・中性の区別なし) ↔ デ skilten/huset, 清水 1995: 60-62, 2021: 87)。次は両性名詞の例だが、形容詞を伴わずに den ['dɛn?] dag「まさにその日」と強勢を置けば、den は指示代名詞になる。-en [ən] はつねに無強勢の後置定冠詞である。

- (16) デ *en* dag ある日—*en* lang dag ある長い日 (ド *ein* Tag—*ein* langer Tag)
dagen その日—*den* lange dag その長い日 (*der* Tag—*der* lange Tag)

後置定冠詞は名詞への「前接語」(enclitic)であり、名詞の文法的機能を左右する「接尾辞」(suffix)ではない。ア/デ(主格)単数 *dagur-inn*/*dag-Ø-en* 「その日」—複数 *dagur-nir*/*dage-ne* のように、名詞(ア -ur/-ar, デ -Ø/-e)と後置定冠詞(ア -inn/-nir, デ -en/-ne)は別々に語形変化する。「接尾定冠詞」(suffixed article)という用語は不適切である(清水 2001)。後置定冠詞はバルカン半島諸言語の相互接触による「バルカン言語連合」(ド Balkan-sprachbund)にも見られ、ヨーロッパ諸言語の類型論的指標の1つである。

名詞に前置する形容詞修飾語を伴うと、アイスランド語は通常、やはり後置定冠詞を用いる。一方、フェーロー語、スウェーデン語、ノルウェー語ブークモールとニューノシュクは、「二重限定」(double determination)によって、「前置定冠詞+形容詞弱変化+名詞—後置定冠詞」とする。

- (17) ア 不定: *dagur* ある日—*langur dagur* ある長い日
 定: *dagurinn* その日—*langi dagurinn* (古 *hinn* *langi dagur*) その長い日
 71 不定: *ein* dagur—*ein* langur dagur
 定: *dagurinn*—*tann* langi *dagurinn* (古 *hin* langi dagur)
 ス 不定: *en* dag—*en* lång dag 定: *dagen*—*den* långa *dagen*
 ブ・ニ 不定: *en* dag—*en* lang dag 定: *dagen*—*den* lange *dagen*

唯一指示物の固有名詞や定型表現には、前置定冠詞 *den* をつけない(ス Gamla Stan ガンムラ・スターン(ストックホルムの旧(古い *gamla*←*gam-mal*)市街(*stan*←*stad*+*-en*)), *franska revolutionen* フランス革命)。北フリジア語のD-定冠詞に似て、指示代名詞の面影を残しているのである。

(17)のカッコ内に示したように、アイスランド語とフェーロー語には、「前置定冠詞 *hinn*/*hin*+形容詞弱変化+名詞」による古風な表現がある。たとえば、1816年にデンマークの言語学者ラスク(Rasmus Christian Rask 1787-

1832)らの主導で創設された『アイスランド文学会』(清水 2009: 26, 2016: 218)は、ア *Hid* íslenska bókmenntafélag (比較: デ *Det* Islandske Litterære Selskab-Ø, ス *Det* isländska litteratursällskapet) である。

ア hinn/フ₁ hin は古ノルド語の指示代名詞 hinn に由来する。後置定冠詞 -inn は 1100 年以降に例証されるが、古ノルド語には「名詞 + 形容詞弱変化」(古ノ Hákón *góði* ハーコン善良王 ← *góðr* 良い) と並んで、指示代名詞 hinn の付加で限定の意味を補強する「名詞 + *hinn* + 形容詞弱変化」(古ノ Hákón (*h*)*inn* *góði*) があった。名詞への接語化で hinn の指示詞標識 h- が脱落し、定冠詞 -inn に発達したらしい (古ノ (-)inn < 古ノ hinn < ゲ *hinaz, Haugen 1982: 95, 173f., Prokosch 1939: 273f.)。ア hinn/フ₁ hin は大陸北ゲルマン語では「th/p/d/t-系列」の den に代わられた。一方、離島北ゲルマン語のこの両言語では、文語的表現に用いる前置定冠詞として残っている。

このように、前置定冠詞 den は「指示代名詞 hinn > 定冠詞 -inn」という発達の後で、形容詞修飾語の付加に伴う限定の意味的補強に援用した指示代名詞 den から独立して誕生した。デンマーク語の *den* lange dag「その長い日」/ *dagen*「その日」の複数形は、*de* lange dage「その長い日々」/ *dagene*「その日々」だが、単数形の den [ɖɛn?] と -en [ən] は似ていても、複数形の de [d̥i] と -ene [ənə] はつながらない。指示代名詞の弱化による定冠詞の発達は、言語類型論的に最も自然な「定性」(definiteness)の獲得プロセスとされている。それが繰り返された北ゲルマン語は、「定冠詞の発達サイクル」(definite article cycle, Lyons 1999: 326-330)の好例と言えるだろう。

1-7. ルクセンブルク語の定冠詞—無強勢形と強勢形

「定冠詞 + 名詞」↔「定冠詞 + 形容詞 + 名詞」の間で定冠詞の語形が異なる西ゲルマン語の例には、ルクセンブルク語がある。同言語の定冠詞は無強勢形(弱形)と強勢形に分かれる。(18)に主格形を示す。

「定冠詞 + 形容詞 + 名詞」では、とくに女・中性単数および複数の定冠詞無強勢形 d' は用いず、定冠詞強勢形 *déi*/dat/*déi* がほとんど義務的である。形

- ル *déi*/**d'* jonk Fra その若い女性 *déi*/**d'* Friem その見知らぬ女
dat/**d'* klengt Haus その小さな家 *dat*/**d'* Neitst 最新のもの
déi/**d'* grouss Kanner その大きな子供たち *déi*/**d'* Gréng 緑の党員
(環境主義者たち) (Schanen/Zimmer 2012: 105)

— 17 —

疑問だったが、あるとき大相撲の行司の掛け声で気がついた。「かたや大鵬～、こなた柏戸～」—古い例になるが、「相まみえる A に対するこちら側の B」のように、相手の名を先に呼んで、それと対比するのである。結果的に hinn は「あの」から「この」の意味に近づくことになる。

ア hinn/フ₁ hin との関連語には、ド jener「あの」があり、前者はこれと指示詞標識 h- (<代名詞 *hi- (ゲ *xī, Orel 2003: 172) <印欧 *ke) の不変化詞 j- (<印欧 *je-) との複合によるとも言われている (Fulk 2018: 198, Krahe/Meid 1969⁷b: 57)。ド jener は関係文の先行詞以外では、dieser「この」と対比する用法が基本で、それ以外は zu jener Zeit「その当時は」などの「文脈内指示」(テキスト内指示 textual deixis) に限られる。「場面内指示」(situational deixis) には、「定冠詞+名詞+da/dort」(あの・その～) を援用する。ドイツ語学者の関口存男は、Nimm dich vor jenem Menschen in acht!「あの男には注意したほうがいいぜ」について、「jenem が少し変だねえ。『あの』と言うからといって必ず jener を使うとは限らない。… vor dem Menschen da と言い給え」(関口 2019: 11) と説いている。文豪トーマス・マンも、イギリス人が „Sehen Sie **das da**!“ 「あれをごらんなさい」の代わりに、„Besichtigen Sie **jenes**!“ などと言いがちな癖を小説『ファウスト博士』(ド *Doktor Faustus* 1947) で指摘している⁵。

ところで、英 this にあたるド dieser/diese/dieses「この」は、ゴート語を除く古ゲルマン諸語の発明で、「指示代名詞 der/das/die + 直示的強調の意味の不変化詞 -si(-se/-s)」の複合だった (Fulk 2018: 199)。ド das にあたる英 that (<古英 þæt, 1-3 (4) 参照) は、定冠詞のお株を the (<中英 þē<古英 sē) に奪われて、遠方指示の意味を獲得し、this とコンビを組んだ結果である (1-3 参照)。古くは、古ルーン語の *sasi/susi/patsi* のように (sa-/su- は「s-系列」の残存)、「内部屈折」(ド innere Flexion, Krahe/Meid 1969⁷b: 67; ド

⁵ Adrian war sofort immer mit allen Söhnen Albions (i. e. Engländern) bekannt, redete ihre Sprache mit ihnen und wußte komisch ihre Versuche im Deutschen nachzuahmen, ihre Ausländer-Schwäche für das Pronomen „jener, jenes“, wie sie also sagten: „Besichtigen Sie jenes!“ wenn sie nur sagen wollten: „Sehen Sie das da!“ (Eggeling 1961: 104)

Binnenflexion, Paul/Wiehl/Grosse 1989²³: 228) を示す変則的な語だった。7a 単数男性 *celui-ci*/女性 *celle-ci* 「こちらのもの」のような感じである。その後, *bes* < **sa-si*/**pe-si* と発達した語幹に, 語尾をつける通常のパターンに移行した (Ramat 1981: 90, ド *dieser*/*dieses* < 中高ド 男性単数主格 *dirre* (< **dir-se*) /属格 *disse* (< **dis-se*))⁶。

スウェーデン語の *denna/detta/dessa* (両性単数/中性単数/複数) はそのなごりである。しかし, 話し言葉では好まれない。指示代名詞に *här/där* 「ここ/あそこ」を加えた 「den/det/de *här* (+名詞-後置定冠詞) この」↔ 「den/det/de *där* (+名詞-後置定冠詞) あの」が現在の主流である (ス *den här/där boken* この/あの本)。ドイツ語の *das Buch hier/da/dort* 「この/その, あの本」もそうである。上述の北フリジア語フェリング方言でも, 「D-定冠詞+場所副詞 *heer* ここ/*diar* そこ」による *deheer/detheer/dönheer* (+名詞) 「この」, *dediar/detdiar/döndiar* (+名詞) 「あの」と言う。モーリング方言も 「*diheere/jüheer/dâtheer/daheere* (+名詞) 「この」, *dedeere/jüdeer/dâtdeer/dadeere* (+名詞) 「あの」となる (清水 1992: 148) ただし, いずれも発話時での場面内指示に限られ, 前後のコンテキストに応じた文脈内指示 (テキスト内指示) には使わない。

参考文献

- Arfsten, Antje/Paulsen-Schwarz, Anne/Terhart, Lena (2019) *Friesische Gebrauchsgrammatik Fering*. (Vorläufige Version, Stand 31. 12. 2019). Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
- Braune, Wilhelm/Ernst, A. Ebbinghaus (1979¹⁶) *Althochdeutsches Lesebuch*. Tübingen: Niemeyer.
- Donaldson, B. C. (1983) *Dutch. A Linguistic History of Holland and Belgium*. Leiden: Nijhoff.
- Duden (2009⁸) *Die Grammatik*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.

⁶ 古ノルド語には, 不変化詞 *-si* の代わりに同じく直示的強調の意味を持つ *-a* が加わった語形がある (古ノ *penna* 男性単数対格, *petta* 中性単数主・対格)。古ノ *þessa* (中性単数属格) /*þvísá* (中性単数与格) は *-sa* の重複による (Krahe/Meid 1969⁷b: 68)。

- Ebert, H. Karen (1971a) *Referenz, Sprechsituation und die bestimmten Artikel in einem nordfriesischen Dialekt (Fering)*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
- Ebert, H. Karen (1971b) Zwei Formen des bestimmten Artikels. In: Wunderlich, Dieter (Hrsg.) *Probleme und Fortschritte der Transformationsgrammatik. Referate des 4. Linguistischen Kolloquiums Berlin 6. bis 10. Oktober 1969*. München: Hueber. 159–174.
- Ebert, H. Karen (1998) Genusynkretismus im Nordseeraum. Die Resistenz des Fering. In: Boeder, Winfried/Schroeder, Christoph/Wagner, Karl Heinz/Wildgen, Wolfgang (Hrsg.) *Sprache in Raum und Zeit. In memoriam Johannes Bechert. Bd. 2. Beiträge zur empirischen Sprachwissenschaft*. Tübingen: Narr. 269–282.
- Eggeling, H. F. (1961) *A Dictionary of Modern German Prose Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Fife, James/King, Gareth (1998) Celtic (Indo-European). In: Spencer, Andrew/Zwicky, Arnold M. (eds.) *The Handbook of Morphology*. Oxford/Malden, Massachusetts: Blackwell. 477–499.
- Fischer-Dieskau, Dietrich (ed.) (1995) *The Fischer-Dieskau Book of Lieder* (tr. Bird, George/Stokes, Richard). New York: Limelight Editions.
- Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Goltz, Reinhard, H./Walker, Alastair G. H. (1990) North Saxon. In: Russ (ed.) 31–58.
- Haugen, Einar (1982) *Scandinavian Language Structures. A Comparative Historical Survey*. Tübingen: Niemeyer.
- Heinrichs, Heinrich Matthias (1954) *Studien zum bestimmten Artikel in den germanischen Sprachen*. Gießen: Wilhelm Schmitz Verlag.
- Herrmann-Winter, Renate (2006) *Hör- und Lernbuch für das Plattdeutsche*. Rostock: Hinstorff.
- Hill, Eugen (2013) *Einführung in die historische Sprachwissenschaft des Deutschen*. Darmstadt: WBG (Wissenschaftliche Buchgesellschaft).
- Hodler, Werner (1954) *Grundzüge einer germanischen Artikellehre*. Heidelberg: Winter.
- Johannsen, Albrecht (1991 (1956)) *Beerid. Fräsche dächte foon Albrecht Johannsen*. Bräist/Bredstedt, NF: Nordfriisk Instituut.
- 古賀允洋 (1995²) 『中高ドイツ語』 大学書林.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969⁷b) *Germanische Sprachwissenschaft II. Formenlehre*. Berlin: De Gruyter.
- Löfstedt, Ernst (1964) *Zum bestimmten Artikel in den inselnordfriesischen Mundarten von Föhr und Amrum*. Uppsala: Almqvist & Wiksell.
- Löfstedt, Ernst (1968) *Beiträge zu einer nordfriesischen Grammatik. I. Das Substantiv und*

- das Adjektiv, das Zahlwort und der bestimmte Artikel*. Uppsala: Almqvist & Wiksell.
- Lyons, Christopher (1999) *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中尾俊夫 (1983²) 『英語発達史』 篠崎書店.
- Nübling, Damaris (1992) *Klitika im Deutschen. Schriftsprache, Umgangssprache, alemannische Dialekte*. Tübingen: Narr.
- Nübling, Damaris (1998) Wann werden die deutschen Präpositionen flektieren? Grammatisierungswege zur Flexion. In: Fabri, Ray/Ortmann, Albert/Parodi, Teresa (eds.) *Models of Inflection*. Tübingen: Niemeyer. 266-289.
- Orel, Vladimir (2003) *A Handbook of Germanic Etymology*. Leiden/Boston: Brill.
- Paul, Hermann/Wiehl, Peter/Grosse, Siegfried (1989²³) *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Prokosch, Eduard (1939) *A Comparative Germanic Grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America/University of Pennsylvania.
- Ramat, Paolo (1981) *Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.
- Roehrs, Dorian (2009) *Demonstratives and Definite Articles as Nominal Auxiliaries*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Russ, Charles V. J. (ed.) (1990) *The Dialects of Modern German*. London: Routledge.
- Schanen, François/Zimmer, Jacqui (2012) *Lëtzebuergesch Grammaire luxembourgeoise*. Esch-sur-Alzette: EDITIONS Schortgen.
- Schobinger, Viktor (2007⁸) *Zürichdeutsche Kurzgrammatik*. Zürich: Schobinger Verlag.
- 関口存男 (2019) 『セレクション関口存男 和文独訳漫談集』 三修社.
- Selmer, Ernst W. (1926) *Über den Gebrauch des bestimmten Artikels im Nordfriesischen*. Oslo: I Kommisjon hos Jacob Dybwad.
- 清水 誠 (1992) 「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法. V. Tams Jörgensen: *Kort språkeliir foon dât mooringen frasch* 訳注. 『北海道大学文学部紀要 40-3. 65-162.
- 清水 誠 (訳) (1995) 「K.リングゴー著: デンマーク語方言概説」 (K. Ringgaard (1973²) *Danske dialekter. En kortfattet oversigt*. København: Akademisk Forlag.) 『ノルデン』 第32号. 31-105.
- 清水 誠 (2001) 「屈折語尾か後接語か—北ゲルマン語定冠詞の類型論的考察」 『日本アイスランド学会会報 20』 36-45.
- 清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』 北海道大学出版会.
- 清水 誠 (2009) 『北欧アイスランド文学の歩み—白夜と氷河の国の六世紀』 現代図書.
- 清水 誠 (2010) 「フリジア語」 町田 健 (監修) 『ニューエクスプレス・スペシャル ヨーロッパのおもしろ言語』 白水社. 68-87.
- 清水 誠 (2016) 「アイスランド語研究の歴史と言語規範の形成」 加藤重広/佐藤知己編著

『情報科学と言語研究』現代図書. 195-237.

清水 誠 (2019) 「ドイツ語から見たゲルマン語—名詞の性, 格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158号. 37-76.

清水 誠 (2020) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (2) —属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160号. 37-96.

清水 誠 (2021) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (3) —名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162号. 35-101.

Szczepaniak, Renata (2011²) *Grammatikalisierung im Deutschen*. Tübingen: Narr Francke Attempto.

寺澤芳雄 (編) (1997) 『英語語源辞典』研究社.

Thráinsson, Höskuldur/Petersen, Hjalmar P./Jacobsen, Jógvan í Lon/Hansen, Zakaris Svabo (2004) *Faroese. An Overview and Reference Grammar*. Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.

Wilts, Ommo (1995) *Friesische Formenlehre in Tabellen II. Föhr*. Husum: Matthiesen.